

帰って来た詩人 Franz Kafka

——解釈のための一視点として——

加 藤 慶 二

Kafka はなによりもまず詩人であると同時に人間であつた。最近この考えは日に増して強くなり、Max Brod らの主張する宗教的見地からでなく、もつと素朴な気持ちから Kafka を考えてみたいと思うようになった。何故なら、よしそれが誤っているにせよ、ユダヤ的な思想を超えて、詩人の普遍的な人間としての共感をかきたたせるものがあり、作品の個々の問題に入る前に、Kafka の素顔に触れてみたいと思つたからである。この小論では次のような順序で述べてみたいと思う。

- I Kafkas Ambivalenz
- II Prozeß : 特に Der Onkel Leni (6 章) を中心として
- III Heimkehr : 帰って来た詩人
- IV Ein Hungerkünstler
- V 展望への一視点

I

1913年7月21日の Kafka の日記に> Ich muß viel allein. Was ich geleistet habe, ist nur ein Erfolg des Alleinseins. <と、同年8月21日には> Da ich nichts anderes bin als Literatur und nichts anderes sein kann und will, ……<と述べ「孤独」にしてはじめて作品を書くことができるのであり、自分は文学を志す以外のなにものでもないし、なにものでもあり得ないし、またありたくない、と真摯なまでに自己の在りかたと態度を示す一方> Unfähigkeit, allein das Leben zu ertragen, nicht etwa Unfähigkeit zu leben, ganz im Gegenteil, ……<とまったく正反対の言葉を冒頭の言葉とならべて F. B 嬢との結婚問題に当面して、示しているのである。「結ばれることへの不安……その時僕は決してもう一人ではないのだ」と云いつつも、人間の本能に対する弱さ、「僕自身の生命の殺到、僕個人のもろもろの要求」に傾きかける Kafka、ここに口をぬぐわず、赤裸々な姿で迷いきつている人間 Kafka の素顔を見るのである。しかしこの素顔は、詩人の内面においていわば一つのアキレスケンなのである。Kafka は如何にしてこの相異なる志向性の軋轢から脱出し、克服するか、それは彼が「文学を自己の唯一の生命」とする詩人としての課せられた問題でもあつた。Kafka における「孤独 > Alleinsein <」とは他の人々と離れて、社会から遠ざかりただ一人いる孤立意識や寂寥感のあらわれでなく、むしろ社会機構の中にあつて自己を outsider の意識でもつて考察し、自分自身の置かれた状況を積極的に、赤裸々に見つめ、直視した結果の所産に他ならない。人生において消極的、否定的な孤立意識をもつたそれとはまったく対称的な生きかたであり、いわば本来的に自己に目覚めた実存の根源的な姿である。それは、宗教的倫理的関係を除けば、根底においてはほぼ Kierkegaard の「単独者」の精

神そのものである。Kafka の短篇 ⁶⁹ >Der Aufbruch< にこのことがうかがえる。

II

前章 I において、Kafka の「孤」なる「個」への志向性と、又一方現存在性への埋没、即ち日常性、社会関係への埋没の可能性があることを示した。ここでは >Der Prozeß< をとりあげ、詩人としての、前章で述べた課題が如何に展開されているかを考えてみたい。

>Der Prozeß< は個々の章がそれ自体独立したものであり、Max Brod が Kafka の朗読、或いはその内容から後ちに構成したものであることは周知のとおりであるが、今この問題についてここでは触れず、全体を一つの作品として論をすすめたい。

>Der Prozeß< の主人公 Josef K. の名前は 1914 年 7 月 29 日の日記に初めて見られる。8 月にこの原稿は更に進み、第 1 章は、F.B 嬢との婚約解消後、1 ヶ月経過した 9 月に成立。9 章は同年 12 月に、更に数章がこの月に、5 章と 6 章が翌年 4 月に、処刑の場面は 1916 年の 7 月に書き上げられた。以上がこの作品のおよその成立年代である。

>Der Prozeß< に関して Felix Weltsch の、Kafka の結核の病いをとうして解釈しようとする試みから、Emrich, Sokel, Politzer にいたるまで様々な見かたが今までとられてきた。Heselerhaus はこの作品を「Antiroman」としてとらえることにより、一見、我々の生活から奇異なものとして感ぜられる出来事を把握しようと試みている。しかしこの小論では >Schuld< とか >Gericht<、或いは >奇異な出来事< を考察する前に、それ以前の問題として先に述べた課題にふれてみたいのである。

「……できるだけ禁欲な生活すること、独身の男性よりもつと禁欲に、これが結婚生活を耐えてゆく、自分にとつての唯一の可能性である。だが彼女は？」¹⁰⁹ Kafka は常に、それが不可能であるということを感じても、「人間関係¹¹⁰をたちきつて」「虚偽の生じない限られた美しい円」で、よしそれが実際には F.B 嬢との間だけだつたにせよ、「孤」なる「個」としての自己を、二人の人間関係においても、求めようとしたのである。作品 >Der Prozeß< においては更に広い意味での、このような探求の試みがなされていることを見落すわけにはいかない。

この作品はいわば未完のままで終り、後ちになつて Max Brod が明らかに誤りであると彼が認めた箇所は訂正され出版されたことは前に述べたとおりであるが、Max Brod の第 3 版のあとがきによれば、Kafka は各章に番号はふらなかつたが表題は記入してあつたと述べている。

物語における表題はその要旨をあらわし、しばしば結びの言葉の暗示として示されることもいままさらここで述べるには及ばない。しかるにこの >Der Prozeß< の場合はどうだろうか。

第 1 章が Verhaftung

Gespräch mit Frau Grubach

Dann Fräulein Bürstner

第 3 章が Im leeren Sitzungssaal

Der Student Die Kanzleien

第 6 章が Der Onkel Leni

第7章が Advokat Fabrikant Maler

第8章が Kaufmann Block

Kündigung des Advokaten

第10章が Ende

これ以外の2, 4, 5, 9章は Erste Untersuchung, Die Freundin des Fräulein Bürstner, Der Prügler, Im Dom であるがこの4つの章を除いて1章は >dann< によつて上に書かれた二つの表題と時間的関連を持つが、その他はほとんど並列的に、対等にならべてあり、7章にいたつては冠詞すらも略してあり、あの既成概念の否定を叫んだ表題主義文学の詩形式の感じさえするのである。これらの表題の言葉は前後の必然的な関係はなく、あたかもそこへ、偶然に何んの理由もなく投げだされたかのようである。Kafkaはこの「虚偽に満ちた」無秩序な世界を、事物があるようなものの次元から構成しようとした試みではなかろうか。

Josef K. は或る朝、突然逮捕されるのである。しかし一向に何んの事由で彼が告訴されたのかかわからない。始めはごく軽い気持ちで、何かの間違ひだろうと考えていた K. も日曜日ごとに裁判所から審理を受けるようになると、だんだんことの重大さに気がつき懸命に抗議するのだが、ときおり何んの理由で何んの為抗議をしているのか彼自身にも理解できなくなってしまう。しかし実際のところ Josef K. の日常生活はそれがため、何んら支障はきたさず、毎日銀行へ行き業務主任の責務をはたしているのだが、彼を取りまく行員、或いは客が騒ぎだて始めるのである。

第6章 >Der Onkel Leni< では田舎から心配のあまりでできた伯父が Josef K. をこの訴訟から救うためいろいろ手段を講じ努力するのであるが、Josef K. が肝心なときに Leni という女性に心を奪われ関係をもつたため、そのことにより伯父の努力が水の泡に帰してしまい、最後に Josef K. に向つて次のように叫んだのである。「何んということをお前はしてくれたのだ！ うまく行つたおまえの件をすつかり駄目にしたじやないか、小さなきたならしいメスともぐりこんだりして……。」Leni という女性に対し、本能に敗れた Josef K. の将来を伯父の口から言わせている。この6章はすでに10章の結末を暗示しているのである。

いまこの6章を更に詳しく省察してみよう。ここに登場して来る人物は Josef K. の他に小使、Onkel Karl, Erna, 代理、二三の行員、支店長代理、門衛、運転手、Huld 弁護士、寝巻姿の紳士、Leni, 事務局長、Bürstner 嬢、延丁の奥さん、Elsa, 以上の16名がこの章にでてくるが実際に Josef K. を中心にして、或いは彼を交えて話しを交すのは、Karl・代理・寝巻姿の紳士・Huld 弁護士・Leni・事務局長の6名だけで、あとは会話の中に、或いは描写の中で間接的に挙げられるだけである。

列挙した登場人物を紹介する際の、その描写に注目してみたい。伯父 Karl は Josef K. に言わせれば「田舎からあらわれる幽霊¹³⁾」であり、代理は伯父をして「操人形¹⁴⁾」と呼ばせ、Leni は「人形のようなかんじの円い顔¹⁵⁾」をし「青ざめた頬」をして彼等の前に姿をあらわし、弁護士は病気ですべ彼等に教えて姿をかくす紳士は、社会とはまったく没交渉でいることを暗示するような「寝巻姿¹⁶⁾」であられ、Josef K. にあるいは救いの道を見出すことができるかも知れない Huld 弁護士によつて紹介される、同室の部屋の隅にいた事務局長は、彼等の前にローソクの光に照らされてあらわれるとき「その隅で何かが動き始め」彼等が今まで気がつかなかつたのは「彼は恐らく全然呼吸をしなかつた」ためであり、「短いつば

さのように」両手を動かして「一切の紹介や挨拶はおことわり」というような動作を示し「自分がいることにより他の人の邪魔を決してしたくない」という気持をあらわしているのである。また7章では工場主から Josef K. は自分の訴訟に対して有力な手がかりを得られる画家を紹介されるのだが、「彼の本当の名前」は工場主もわからず、ただ「雅号」だけ知らされるのである。

Hesels Haus によれば Antimärchen の主人公達は操り人形である、と云っているがこれはたんに言葉のすり替えであつて本質的なものには触れていない。Kafka の諸人物の構成は先ず日常的な人間関係を断ち切つたところからはじまる。それは有機的な側面を分解し、無機的な、いわば事物の次元への移行であり、そこには暖かい感性のかわり、冷い厳密な悟性をともなう。「ピカソの絵において、私達は深く人間の始源の型をさぐるため、健全な人間形態を分析し、破壊し、こまかく切断し、その要素へ分析してゆく経過を知ることができる。ピカソの芸術は自然の範型とも古代の範型とも断絶している。彼の芸術はすでにものはや完全な全体的な人間を求めようとはしない。……自然存在の内面構成を示すためヴェールを一枚また一枚とはいでゆく。そしてその芸術はますます深みへと浸透してゆき、真に巨大なものの像をむきだしにしてみせる。ピカソがその力と表現によつて創造しているのはそれである。……創造活動の舞台における最後の成果とともに、近代の人間は自己の像を否定するところに到達するのである。」Berdjajew はピカソの絵についてこのように批評している。これはまさにKafka が現象界を省察する態度に他ならない。

「Was habe ich gehört, Josef ?」 rief der Onkel, als sie allein waren, setzte sich auf den Tisch und stopfte unter sich, ohne hinzusehen, verschiedene Papiere, um besser zu sitzen. K. schwieg, er wußte, was kommen würde, aber, plötzlich von der anstrengenden Arbeit entspannt, wie er war, gab er sich zunächst einer angenehmen Mattigkeit hin und sah durch das Fenster auf die gegenüberliegende Straßenseite, von der von seinem Sitz aus nur ein kleiner, dreieckiger Ausschnitt zu sehen war, ein Stück leerer Häusermauer zwischen zwei Geschäftsauslagen. «Du schaust aus dem Fenster !» rief der Onkel mit erhobenen Armen, «um Himmels willen, Josef, antworte mir doch ! Ist es wahr, kann es denn wahr sein ?» «Lieber Onkel», sagte K. und riß sich von seiner Zerstreuung los, «ich weiß ja gar nicht, was du von mir willst.»

この一節の文章は6章の初め、Josef K. のこのが気になり、心配のあまり田舎からやつて来て、挨拶もそこそこに人払いをして話す伯父 Karl との対話の場面なのである。伯父は激しい調子で机の上に坐りながら「何をしたのか」とK. に問うのであつた。だがK. は伯父の熱心な訊問にも拘らず、即座に答えようとはしない。K. の目差は「窓越しに向う側の通りを眺めていた。彼の席からは小さな三角形の部分だけが、二つの営業用陳列窓の間の空虚な家壁の部分だけが見えるだけであつた」。Kafka は明らかにここで Josef K. の目を日常的な無秩序の次元から、存在しているものの次元へつきおとしている。そういう場所に据えられた Josef K. の心に、この突然の訪問の意味と伯父の云う言葉の真意が全然理解できないのである。それ故伯父に向つて「あなたの言おうとしていることが僕にはまるつきりわからないのです」と云い訴訟について身内の者がそれにより煩わされていることについて「まったく理解できない」と云うのである。一見この遅々とした感覚は実は、Kafka の鋭い悟性なのである。

Emrich によれば、Josef K. は「仕事と“ひと”のなかに完全に埋没されている²³⁾」という。この“ひと”というのは Heidegger の ≧Sein und Zeit≧ のなかで説明されている das Man²⁴⁾ であり ≧たいてい「そこにいる」人びとのことである。その誰れかは、この人でもあの人でもなくひと自身でもなく、幾人かの人びとでもなく、すべての人の総和でもない。その「誰か」は、特に誰れということもできない中性的なもの、世間 (das Man) である。≧即ち人間の現存在性への埋没を日常性への頹落の姿としてとらえており、自己の自覚的存在から離れているありかたである。更に Emrich の言葉は続く。それ故 K. は「現代社会の平均的市民を代表しているのである²⁵⁾」と。なるほど訴訟に関して彼が送る日々の生活をおつてゆけば Emrich の論理は確かに正しい。だがそれは一面においてである。伯父とのさきにあげた対話からでもわかるように、「埋没した平均的人間」から、ときおりのぞく鋭い視線は一体なんなのであろうか。

Kafka の激しい Ambivalenz がここに示されている。Josef K. は即ち、F.B 嬢との結婚を望み、本能にひかれ「孤」なる「個」として耐えてゆくことのできない“das Man”の Kafka であり、また一方孤独を主張し文学を天職とする詩人 Kafka でもある。しかし前にも述べたように Leni に心を奪われることにより、K. の訴訟にたいして「初めはただ目だたぬくらいだが、後になつて次第にはつきりと影響の及ぼすことができる」『高位の役人の中でも比較的地位の低い』事務局長と個人的関係を持ち、そうすることによって自分を救ってもらえる、この6章において、唯一の示された最大の可能性を自から失つてしまうのである。

Kafka の内部において、人々の相互関係を、いつたんは、無機的な存在であるものの次元からとらえようとする姿勢は、詩人の「孤」なる「個」としてのゆきかたと照応する。その際、詩人の内面において対応するのは鋭い厳しい悟性であることは前にもふれた。そしてこの悟性は非常な観察と、最も広い意味においての無感動で支えられている。

Kafka の作品はカミュなどにより不条理の世界としばしば対比されている。不条理とは一言で云うなら、理性以上のものと理性以下の間の区別をなくして一様にしたところから生ずる。Kafka の世界は日常的次元から眺められていたわくの外に広がるのであるから、その意味においてこの対比は妥当である。そしてそこにあるのは常にわくの外から見つめる非常な観察と無感動だけである。それ故、第10章では「犬のように」Josef K. を殺したのである。そのことにより詩人として自己のなかに存する“das Man”の己を「審理」することにより、また Goethe が Werther において、Carossa が Bürger において体験したごとく、Josef K. をして Leni に溺れさせる²⁶⁾ことにより自から破滅を導かせて、F.B 嬢から自己、即ち詩人 Kafka を救い、世間への埋没を阻止したのであつた。

III

厳しいまでも自己を見つめ、孤独にして詩人の道を歩んだ体験は筆舌に尽し難いものがあつたろう。自信と不安の交錯、そのあまり彼は「化石したように」なるのである。「僕は道に迷っている。真の道は一本の綱の上をゆくのであるが、それは空中に張られているのではなく、地面すれすれに張られてある。それは歩かせるためよりも蹟かせるためにできている²⁷⁾かと思われる」そしてこの苦しみの果てに、試煉の果てに彼を待つていたものは何んであろうか。「この生は耐え難く、かの生は到達しがたく思われる。死のうと欲することは、もは

や恥とはされない³¹⁾」。彼が形而上的に形而下的に孤独にして自己の道を探し歩んだ結果が、苦しさのあまりの死でしかないことをかみしめたのであつた。「魂の観察者は、魂の中へ入れない³²⁾」のと同様、探究者はあくまでも探究者以外の何者でもありえないのである。

Kafka は帰つて来たのであつた。よしそれが「誤つた到着³³⁾」であるにせよ、短篇 >Heimkehr<³⁴⁾ において >Ich bin zurückgekehrt< と又更に >Ich bin angekommen< と僅か一頁にも満たないこのなかで「帰って来た」ことを二度もくり返している。ここに感ぜられるのはもはや癒すことができぬほどの痛々しい孤独のかけであり、「孤」なる「個」の存在へと向う Kierkegaard 等から現代実存主義の人々の底に流れる active な生き方とは異つて、むしろ「個人」としてしか生きられない、どうしようもない淋しさに耐えようとする姿であり、彼の決意と、なかばあきらめを示した言葉なのである。このような体験から彼が得た「存在³⁵⁾」という信条 >「sein」とは「Dasein」であり、かつ「Ihmgehören」なのである< には一種のあきらめとも云える淋しさがまつわっている。

このように「帰つて来た」Kafka にとって「最も大切な、或いは最も魅力あるものとして、人生の展望を得ることの願いが浮かんだのであつた。そして—それは勿論必然的に結びつけられたのだが—他の人々にそのことを書いて確信させることであつた³⁶⁾」一方では詩人の道を歩みながらも、他方では書くことにより他の人々のなかへ帰つていつた Kafka の歩みは、これ等他の人達の、ただひたすら、故郷のさまざまな因習や日常的人間関係をたちきることにより、ひとりになり孤高への道を歩んだ、また芸術のため、主体性確立のため、ややもすれば「孤」なる「個」の悲惨から目をそむけないまでいかなかつたにせよ、それらの美名にかくれ、このことにあまり重きをおかなかつた、いわば自己追求に憑かれた、あまたの近代・現代のドイツ詩人達のなかにおいて、特異な存在を示すひとつの理由なのである。そして彼等が「孤独な個人の存在」を究極な目的とするならば、Kafka は更にそれよりも一歩先の、その目的の後に待っていた問題を提示したともいえよう。このようなことを考慮しながら次に作品にそれがどのように展開されているか少し考えてみたいと思う。

IV

前に述べた >Heimkehr< および >Er< から2年後ちに、即ち1922年に書かれた短篇 >Ein Hungerkünstler< がある。これは Kafka が死ぬ1年前に著者自から発表したものでこの他に Josefine, die Sängerin : Erstes Leid : Eine kleine Fabel と共に4篇を合せ Ein Hungerkünstler がそのまま表題となりまとめられたのである。長い療養生活を経て死期も間近にせまつて書いたこの短篇は、或る意味において最も理解しやすいものであり、「人生の展望」はともかくとしてもそこに Kafka の、あの存在の条理を読みとることができる。Ein Hungerkünstler の Motiv はとりもなおさず芸術家と一般大衆の問題であることは明らかである。Kafka は日記に「このように優れていても、少しも儲けず、そしてまたその他、感謝や名声を受けても決して十分とは云えない、これ等の俳優達に寄せる我々の同情は元来数々の高貴な努力、就中、我々の努力のもつ悲しい運命への同情に過ぎない……」と述べているように、彼等の運命のなかに自己のさだめを見出し、詩人の体験をとおして芸術家のそれを理解したのであつた。

>Ein Hungerkünstler< はある 芸熱心な断食芸師と、彼の興業主とそれを取り巻く人々

についての物語である。街中が断食芸師に熱心な関心を抱いていた時、彼等は何処へ行つても歓迎された。断食期間を大衆は断食芸師が本当に何も食べないかどうか見張るため、不思議にも「肉屋」が人々から選ばれるのである。断食芸師はいかにすすめられようとも、僅かの食物も口に入れないし、否、芸術の名誉がそれを禁ずるのである。いかなる場合にせよ、世人との妥協は許されないし、絶対的なものをひたすら求めるのが芸術家の使命なのである。この意味において断食芸師はまた「殉教者」でもあつた。定められた40日の期間を断食し終えた時、絶大な熱狂でもつて人々の見守るうちに、彼等より選ばれた婦人に身を支えられ手をとられながら断食の“おり”から外へ迎えられるのである。だがしかし断食芸師には常に耐え難い不満が、彼が芸に夢中になればなる程、たまらなく自分の心を苦しめるのである。即ち大衆の自分に対する理解の浅さと、自分の芸を大衆に伝える、橋渡しとしての興業主の興味本位な態度である。

だがこのようなことは永く続かなかつた。或る日突然、大衆が彼の芸を見向きしない時期がやつてきたのである。しかしその徴候は数年前から既にあらわれていたのであつたが、断食芸師は己の芸に没入するあまり、これらのことを見落してしまつたのだ。それで彼は、これ以上大衆のなかにいることは、見世物小屋などで細々と生きることだけだつたし、また一方零落する自分の姿を見るに耐えず、大衆とも、またこの類いまれなる断食生活の相棒、興業主とも別れ、サーカスに身を預けるのである。そこは人でも道具でも、必要とあらばすぐに代えられる大サーカスであつた。彼がサーカスに入るとき契約条件はいつさい、己の自尊心を傷つけない為、見向きもしなかつた。だがここで置かれた位置は動物小屋のそばであり、主役としての過日の面影はなかつた。大抵の人々が自分には一瞥もせず通り過ぎて行くなかにあつて、限りなく自分の芸を高めようと努力するのだつたが、彼を待つていたものはただ餓死であつた。

この短篇においても⁴⁰⁾、断食芸師のありかただけを着目するならば、Kafka のあの“存在条件”が認められるのである。即ち自己の芸術に深い洞察と確信を持ちながらも、どこまでも大衆と交わることを拒否し、見世物小屋にでも入つて彼等の恩恵に従うことを、自から芸術の為になさなかつた断食芸師は人々に忘れられこの世から去つて行くのである。しかしこの作品には ≧Das Urteil≧ などと違つて、Kafka の一種のあきらめとも云える淋しさは⁴¹⁾あるにせよ、断食芸師をみつめる「子供達の輝く目」の中にほのぼのとした希望の光を読みとることができるのである。Wiese も「断食芸師は、この世の外にある点をこの世においてすでに獲得したか、或いは少くとも獲得ができるという人間存在の可能性を示しているのだ」⁴²⁾と Kafka の肯定的な面を指摘している。就中、近代文学以来の常に問題にされた課題の一つとして、「個人」をめぐつてくりひろげられてきたとするならば、その自己確立の代償として我々は不毛な孤独を得た。だがその不毛な孤独のかたわらに常に、Kafka は、かすかな微笑をたたえ立っているのである。Kierkegaard 或いは Nietzsche、及び彼等の思想を受け継ぐ人々が、この時代における我々の在り方を、いわば上に向つて垂直に示唆したとするならば、Kafka はまったく反対に上方から、それらの示唆を反射することにより、こちらへ向つて示したとも云えよう。Kafka はそれ故、近代文学以来の課題「孤独な個人の存在」の、更にその背後にある問題について追求したのであつた。

V

この小論では I において Kafka の Ambivalenz を探ることにより, II ではその二つの志向性が作品 ≧Der Prozeß≦ において, どのようにあらわれているか, III では彼がむかつた「孤」なる「個」の存在の彼方にあつたのは何んであるか, そして彼は何をそこから学びとつて帰つて来たのか, IV ではそれが具体的に作品にどう展開されたか, いわば人間 Kafka の詩人への道程として, いくつかの作品にふれたのであつて, 解釈はしていない。私は Kafka の作品への展望の一視点として以上のことを述べたに過ぎない。(1966年11月)

註

- 1・2) Max Brod は Über Franz Kafka のなかの, Franz Kafkas Glanben und Lehre で宗教的基盤から作品を解釈しようとしている。その一例として Kafka をユダヤ的宗教改革の代表者としてとらえている。S.263 ff.
- 3) T.S.311 4) T.S.318 [T : Tagebücher 1910—1923, S. Fischer Verlag]
- 5) 彼等 2 人の宗教的感情, 時代背景と Prag の特異性を考えればこのことは明らかであろう。
- 6) B.S.114 [B : Bescheibung eines Kampfes, S. Fischer Verlag]
- 7) Jürgen Bosn, Ludwig Dietz, Malcolm Pasley, Paul Raabe, Klaus Wagenbach : Kafka-Symposion S.64
- 8) Felix Weltsch : Religiöser Humor bei Franz Kafka.
- 9) Clemens Heselhaus : Kafkas Erzählformen (Deutsche Vierteljahrschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte 26 Jg. 1952. S.367ff.) 10) T.S.315
- 11) T.S.320 12) R.S.348 13) R.S.331 14) R.S.334 15) R.S.338
- 16) R.S.338 [R: Franz Kafka Die Romane (Amerika, Der Prozeß, Das Schloß) S. Fischer Verlag]
- 17) Heinz Politzer : Franz Kafka, der Künstler. Huld 弁護人を “Huld” という言葉から説明しようとしている S.298 18) R.S.342 19) R.S.368 20) Clemens Heselhaus : 前掲書 S.368
- 21) N. Berdjajew : Der Sinn der Geschichte. S.238~240 22) R.S.336
- 23) Emrich : Franz Kafka. S.260
- 24) M. Heidegger : Sein und Zeit. S.126ff. 25) Emrich : 前掲書 S.260
- 26) Heselhaus によれば「Josef K. の自覚と不安からこのおぼろげな裁判所がだんだんとはつきりした存在になつてくる」前掲書 S.369 と述べてある。Gericht の比喩は, ここで論じないにしても, Sorge から自己の本来的な在りかたへすすむのは “das Man” へ頹落する Dasein の正反対である。この点から見ても Emrich の主張は全面的に肯定はできない。
- 27) R.S.352
- 28) このような見方をしていくと ≧Der Prozeß≦ の難解な奇異な出来ごとを Heselhaus は Anti-roman として解釈するが, この態度は疑問である。なるほど各章の出来事, 及び描写, 挿話など考えると, 理解しがたく, 暗示的であり何度も再読を強いられる。しかしそれは詩人としての, 当時の Kafka の思考のうちにおいて, 形而上的に, 形而下的に体験した世界が複雑奇怪なのであつて——Klaus Wagenbach : Franz Kafka の Prag um die Jahrhundertwende S.65 ff. を読めば

およそのことが理解できよう——決して小説それ自体は難解ではない。否，“人生”のように明晰でもある。 29) 1914年7月28日.T.S.411 30) Das dritte Oktavheft, 1917.10.19

31) Das dritte Oktavheft, 1917.10.25 32) Das dritte Oktavheft 1917.12.9

33) F.Beißner : Kafka der Dichter S.17

34) Ich bin zurückgekehrt, ich habe den Flur durchschritten und blicke mich um. Es ist meines Vaters alters Hof. Die Pfütze in der Mitte. Altes, unbrauchbares Gerät, ineinanderverfahren, verstellt den Weg zur Bodentreppe. Die Katze lauert auf dem Geländer. Ein zerrissenes Tuch, einmal im Spiel um eine Stange gewunden, hebt sich im Wind. Ich bin angekommen. Wer wird mich empfangen? Wer wartet hinter der Küche? Rauch kommt aus dem Schornstein, der Kaffee zum Abendessen wird gekocht. Ist dir heimlich, fühlst du dich zu Hause? Ich weiß es nicht, ich bin sehr unsicher. Meines Vaters Haus ist es, aber kalt steht Stück neben Stück, als wäre jedes mit seinen eigenen Angelegenheiten beschäftigt, die ich teils vergessen habe, teils niemals kannte. Was kann ich ihnen nützen, was bin ich ihnen und sei ich auch des Vaters, des alten Landwirts Sohn. Und ich wage nicht, an der Küchentür zu klopfen, nur von der Ferne horche ich, nur von der Ferne horche ich stehend, nicht so, daß ich als Horcher überrascht werden könnte. Und weil ich von der Ferne horche, erhorche ich nichts, nur einen leichten Uhrenschlag höre ich oder glaube ihn vielleicht nur zu hören, herüber aus den Kindertagen. Was sonst in der Küche geschieht, ist das Geheimnis der dort Sitzenden, das sie vor mir wahren. Je länger man vor der Tür zögert, desto fremder wird man. Wie wäre es, wenn jetzt jemand die Tür öffnete und mich etwas fragte. Wäre ich dann nicht selbst wie einer, der sein Geheimnis wahren will.

35) Das Wort, sein' bedeutet im Deutschen beides : Dasein und Ihmgehören. Das dritte Oktavheft. 1917.11. 30. この言葉は Kafka の作品を理解するうえに重要である。Heidegger は“Dasein”を「われわれ自身がいつもそれであり、とりわけ問うという存在可能性をもつこの存在者を、現存在という術語であらわす」と定義し、人間存在の特徴を「In-der-Welt-sein」としてとらえている。「世界—内—存在」の「内—存在」とは事物存在らに対比して Besorgen 「気をくばる」という在りかたで存在する。「世界」とは、人間存在は決して孤立して存在するのではなく、常に他と共にあるので、この世界という意味は他人と「共にある世界」である。そして他人に対しては Fürsorgen 「気をつかう」であり自分自身に対しては Sorgen 「気がかり」の在りかたで存在する。そして人間存在は Sorgen を契機として非本来的ありかたから本来的ありかたへ移行することが可能なのである。と Heidegger は主張する。しかし Kafka は更に「Ihmgehören」を加える。gehören の原意は「聴従する」ことなのである。何に? Dasein にだろうか。それはここでは明確に示されていないが、彼の作品に当然主人公が聴従しなければならぬものが、明らかにされている。Georg Bendemann にとっては父であつたらうし、Hungerkünstler にとっては大衆であつた。この一つの条件が欠けると主人公の存在はこの世において否定されるのである。

36) >Er< Aufzeichnungen aus dem Jahre 1920. S.293 37) 1911年10月22日 T.S.112

38) H.Hillmann : Franz Kafka Dichtungstheorie und Dichtungsgestalt. 婦人を無理解な世間の象徴としている。またこのなかで Hungerkünstler の求めているのはこの地上では求められない Nahrung であると言っている。S.84~85

39) B.v. Wiese : Die deutsche Novelle 「おり」の中こそが彼にとつて自由なのだ、と逆説的説明をしている。S.344 40) Das Urteil, Die Verwandlung においても同様なことが認められる。

41) 70頁を参照 42) B.v. Wiese : 前掲書 S.335

Zusammenfassung

Franz Kafkas Werdegang

Keiji KATO

Es ist zweifellos, daß Josef K. im "Prozeß" einereits den Doppelgänger Kafkas, andererseits den des "Man" in Kafka selbst gespielt hat. "Das Man" ist, nach Heideggers Meinung, sorglos dem Durchschnitt in der Welt verfallen. Damals, etwa im Jahre 1913, war in Kafka eine sehr starke Ambivalenz, daß er einerseits seinem Werk zuliebe alle persönlichen Rücksichten außer Acht lassen und andererseits sich mit Fräulein F.B. verheiraten wollte. Kafka war aber im "Prozeß" mit dem "Man" in Josef K. streng ins Gericht gegangen, um sich ähnlich zu retten, wie sich Goethe in "Werthers Leiden" gerettet hat. Als er allein die unsagbare große Not überwunden, das absolute Ich erforscht hatte, da war ja das, was auf ihn am Ziel seines langen Weges wartete, der Tod vor Einsamkeit. Kafka war im Gegensatz zu den vielen heutigen Dichtern, indem sie sich erforscht und ihren Weg erkannt hatten, diesen Weg weiter gegangen waren, wie der verlorenen Sohn, wieder zu seinem Ausgangspunkt zurückgekehrt. In seinem letzten Werk "Hugerkünstler" liegt ein einsames Lächeln.